

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和六十年四月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第四一九号)

慈

光

第三十七卷

第四号

目次

親鸞聖人の信仰	近角常観	(1)
父と子	池山榮吉	(7)
今の一步步々	井上善右衛門	(11)
慈光日誌抄	西元宗助	(14)
一道会記	榭原徳草	(17)
凡心と仏心	花田正夫	(22)

親鸞聖人の信仰 (四)

近角常観

一 仏名号

釈尊一代の間に於て、種々無量に説き給いた法門のその帰結点は那辺に在りやと云えば、唯一の仏陀を説くのが一代仏教の根底である。釈尊一代の仏教広しといえども、之を釈尊の手前で一括して云えば、南無仏、南無法、南無僧の三宝に南無帰依するが、仏教の最初でありて、また最終である。而して此三宝と云うもまた結局は仏宝の一つで尽すのである。がさてその仏宝をば広く説くときは窮まりなきことである。

先ず最初の華嚴經にありては、廣大無辺の仏の境界を説き、其後の諸經には段々とこの仏教界を種々無量に説き広げてある。一代經中種々に多くの仏陀を説いてあれどもそれは数多の別々のものが存在するのでなくして、結局は唯一仏に帰命することの外の無い。即ち南無阿彌陀仏という六字に帰結するのであるから、一代仏教は一仏の名号に摂し尽すのである。斯く初から独断的に云つて仕舞え

未抄
不抄

日常切の
行為

衷心

々は釈尊の時代に生れたること甚だ遙遠にして、釈尊の行蹟を尋ねるともなり難く、且つ又遺し給える教法は高尚幽玄にして、浅間しき我等には容易に證り難きところである。こゝを以て仏陀の示し給える道は、之を辿らんとすれば一歩は一步より困難でいかにしても進み能わぬ。抑我々自ら信仰のことに気付いて、正しき道を行い、世を救い、人を導き、飽まで理想的に運ばねばならぬと力味んで見ても、其種々の理想が実地に於ては到底実現することはむずかしい。例せば彼の忠孝の如きである。忠孝の二つは我国道徳の主眼であつて、中心君父の洪恩を思い来つては、忠ならざらんとするも得ず、孝ならざらんとするも得ざるのである。然るを世人動もすれば臣としては君后に忠ならざるべからず、子としては父母に孝ならざるべからず、忠は斯く斯くなさざるべからず、孝はしかくなくさざるべからず、臣子としては必ずかくなさざるべからずと、かように「唯せねばならぬ」という意味で、之を行わんとするは大なる誤りである。如何に美しき忠孝といえども、かく律法的に強て之を行わんとすれば、恰も鉄鎖の如く苦しく感ぜられて、夫が為に形式的に流れて、其真の意味を失うに至る。兎角道徳問題で誤謬に陥り安き点は、皆この律法主義の筋道で押さんとするからである。忠孝もこゝに至つては生命なき死物となる。今日の道徳問題に於て特に注意すべきは

この点である。

今大聖釈尊の示し給える道は、如何にも高尚なる立派なる如何にも尊い道ではあるが、之をその示し給えるが如く行い戒しめ給いしが如く守らねばならぬと頼りに策励を試みて「せねばならぬ」という律法主義から修行せんとするならば、終に倒れて仕舞わねばならぬ。仮令外形ばかりに之を守り之を行つても、中心より教の如くに行い、實際釈尊の如く證ることを得ずんば、甚だつまらぬものである。況んや我々は朝に誓つても夕に破れ、昨日の行は今日空しくなり、何事も皆駄目になる。律法的に如何に行わんとしても、この相對世界の事情は、決して之を許さぬ。倒底中心より聖道門の修行を完全に成就することは出来ない、聖道門と云うと同時に又難行道と云わる、所以はこれである。斯く云えばとて唯何がなしに最初から行い難い、駄目であると捨てるのではない、それならば一向意味のないこと、なつて仕舞う。聖道の修行は之を自分が必ず行わんと企てて見て、どうしても行い得ぬことを実験したところで、初めて意味が生じて来る。乃でどういふ点が最後の安心であるかというに、我々は如何にしても如説に修行することも出来ず、如法に心を清うするをも能わぬ我れは実に詰らぬものであると、目醒めた最後に頭われ来るものが絶対仏陀の恵である。噫我は如何にもつまらぬものである、此の如

よもかく

きものを捨てずして広大の恵を灑いで下さるは仏陀ばかりである、あ、辱ないと安心の門が開けて来る。これが念仏宗である、浄土宗である、仏陀を念じて仏の許に往くという道である。恰も彼の忠孝は律法的に之を行わんとすれば、忠一つも孝一つも完全に出来るものでないが、一朝君父の恩恵に気付くときは、中心悦服して其の後の行動は知らず識らず真の忠孝となる。一旦律法的に倒れたる忠孝も、広大の恵を認めたまは、一転して信仰主義となり来りて立派なる忠孝となる。今亦然りて我力極まって倒れたるものが、忽然仏陀偉大の恩恵に気付くときは、感謝の念仏唇を衝いて溢れ出する。一仏の恵を真に喜ぶ心持は恰も忠臣の如く孝子の如くである。これによりて天親菩薩の

世尊、我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命すと云われたる論文をば、曇鸞大師は註を下して

夫れ菩薩の仏に帰する、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰す^しが如く、動静已に^にあらず出沒必ず由あるが如し、恩を知りて徳に報ず、理宜敷く先ず啓すべきなり。

と云うて、忠孝の文字を以て信仰を解釈せられた。此の如く此浄土念仏の行は自ら策勵して進むにあらず、仏陀の偉大なる力よりして易く行せしめらるゝのである。よりて之を易行道と名くる。我等平素難行道易行道とか、聖道門浄土門とかいふ名称は耳慣れて居る為に、却て殆んど其意味

の如く極端まで来ったのはそこに大なる理由がある。即ち二十年來台嶺に在りて試み試みて終に之を見出さざりし律法主義をすて、法然上人の言下に他力信仰に入ったのである。それであるから親鸞聖人は、師の法然上人が斯う為されたから、自分もこうせねばならぬと律法的に念仏を唱えたのでない、法然上人が此の如く念仏一つになつて居られる所以は、何の点にあるかということを全く実験的に味われた為である。親鸞聖人の実験それ自身が全く法然上人の実験と一致である。彼の法然上人は九才の時父時国が仇の為に殺されたが動機となつて仏門に入り、それより四十三才に至るまで多年の門、行えるだけ行い一切経をば五遍までも読んで種々修養を試みたが、如何にしても光を見出すことが出来なかつた。最後に於て善導大師の觀無量壽經の疏を読み

一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に、時節の久近を問はず、念々に捨てざるものこれを正定の業と名く、彼の仏の願に順ずるが故に

を得られたのである。それより上人の一代は、南無阿弥陀仏と称する一つで往生すべしという簡單なる言辭で教化せられた。此の如く南無阿弥陀仏は上人に於ては真の光であつた。上人と同じ經驗を有せる親鸞聖人は、また南無阿弥

を感じざるが如くであるが、今之れを新しき言辭を以て言い換えれば律法主義信仰主義と言つてよからう。此二主義を以てすれば、今の聖道門浄土門難行道易行道は云うに及ばず、古今のあらゆる宗教の大問題は皆悉くこの式で解決が出来る。

釈尊も修行時代には当時の婆羅門教の宗義に従つて、哲學をも学び苦行をも修し、色々と試みられたが、到底婆羅門教の律法主義では安心出来ぬ。其処でそれらをすて、尼連禪河に浴して、菩提樹下金剛宝座に端坐して、心中より湧き出する解脱涅槃の妙味を以て成道せられたのである。

従來の律法主義をすて、自己が信仰の妙味から説き出されたのが、釈尊一代の教法である。其以後龍樹菩薩の難行道易行道道禪師の聖道門浄土門、皆此経路がずうと貫いてある。広く云えば仏教に二種ありて、一には聖道門、二には浄土門であると云い得る、けれどももう一つ之を極端に云うならば、此二門が相對的に併び立つものに非ず、聖道門洵に尊き大聖の道なれども、それが律法的に陥つた為に釈尊の真意を失つたものである。釈尊の本意は、唯絶対無限の仏の恵を説いたので、つまり一仏名号に帰着するのである。換言すれば聖道門は仏教の真相にあらず、唯此念仏の信仰が真の仏法である。要するに一代仏教の真髓は如来の本願である。これが抑親鸞聖人の腹である。聖人が此

陀仏を以て真の光とせられた。よりて一代仏教は如来の本願の外なく南無阿弥陀仏の名号に結歸する、これが仏教の真髓であると確信せられたのであります。

前に云う如く仏教は初からして南無仏南無法南無僧の念三宝である。我國の教主聖徳法皇も二才の時に南無仏と称えられしを初めとして、一代の自行化他殊に念仏を主とせられた。其以後我邦には念仏の法は漸々盛んに行われたけれども、未だ充分に念仏一法とならず、種々の行法に伴つてあつた。然る所以のものは、法然上人がこれ程までに味われた程の味が出て来なかつた為である。如何に人生何物も頼るべきなしと知つて、一心に念仏に凝つて居つても、広

大の仏の恵に遇わずして空しく恵の源を求めつゝあるという念仏の称えようならば、真の本願の念仏でない。歴史的に云えば慈覚大師が支那の五台山に登りて、一行三昧の念仏を伝え来つて、比叡山に於て頻りに念仏を称えられた。

かく天台宗にも真言宗にも既に念仏が伝えてあつたが、未だ法然上人の如き絶対他力の念仏でない。甚俗な譬えであるが彼の石童丸が悲しみ、方々と親を尋ねあるいた如き心持で称うる念仏であつた。私が曾て自己の精神上に真の恵の友は無きか、真の親はあらざるか、慰めは無きか、光は無きかと日夜切に求めて泣いて、涙出でざるに至つても、尚光を見出し得ざりしその時の心状と同じ意味の念仏

であると察する。法然上人以前の念仏は皆これである。唯こ、に一つ云うべきは横川の源信僧都である。僧都是一代念仏を修行なされ、其著往生要集には其信仰を委しく書いてあるが、一言以て之を云えば僧都の念仏は絶対他力の念仏である。法然上人は夙にこの往生要集を取りて熟読遊ばしたれど、其時分には未だ光を見出されなかつたが、善導大師の観経疏の一心専念の文に当りて、一心と云えば二心なく、専念と云えば余事を雑えず、行往坐臥行儀の如何によらず、時節の久近修行の長短に拘らず、念々不捨常に忘る、ことなきは是れ極樂に往生する正定業である、これ此方より仏に向うてかゝるに非ず、仏の至誠真実の本願がある。夫に従順するの他なしと氣付き来り、仏陀の我等を求め給う強き念力を見出して、猶予躊躇の暇なく全く仏陀救済の力強き御恵を喜ぶと同時に口を衝いて念仏が溢れ出た。依之上人も願彼仏願故の文心肝に徹すと自語せられた。

我々も曾ては真に同情者がほしいと求め乍ら、愈以て安心を得ざりし所以のものは、此仏願ということに氣付かざりしからであつた。漫然聞くと仏願というは書いた個條の如く聞えるが、決してそうでない、仏陀の大悲我々を常に眺めて居て下さる切なる念力が仏願である。石童丸が如何に親の名を呼び乍ら求め探しても、親が嘿して名乗を挙げざるが故に現に親の前に立ち乍ら安心を得ぬのであるが、

ホッ、モウ
うわめたる

行老と九

りては救わるべきにあらざる我等に向つて、持戒せよとも云わず、布施等の行を勤めることも求めず、我々に最も称易く、最も接し易きものを選んで以て、与えらるゝ念仏である。選択集の題下に

南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本

と標してある、是れ全く法然上人自己の実験の披歴である。此上人実験の儘を表出したるが選択集であるから、実験の道筋の痛快である如く、其著書も如何にも明快に書いてある。「聖道を捨て、浄土に帰す」と云い、「雑行を捨て、正行に帰す」と云い、「当に知るべし随他の前には暫らく定散の門を開くといへども、随自の後には還て定散の門を閉づ、一開以後永く閉じざるものは唯是念仏の一門」と云い、「聖道門を擱きて選で浄土門に入れ、諸の雑行を抛て選で正行に帰すべし」と実に明快な云い方である。悉く実験の声である。

×十二
末十七
開

こ、に注意すべきことは、こ、が三段になつてあることである。先ず第一は仏陀の教門八万八千であるが、其中に念仏が行じ易いという云い方である。この云い方は念仏ということとは出来ても実験の味は無いのである。第二段は念仏を律法主義に化して、切りに仏を求め仏に依らんとしてあり乍ら、傍にまた諸行を捨てずに居る。これは捨てんとしても未だ大に依るべき或る物を見出さぬから、諸行が捨たらぬのである。第三に至りては本願を信じ敬履を棄つるが如く、全く諸行を捨て、唯一心に念仏する。此段に至ら

我如来の本願は然らず親の方より求め給うところの強き強き意志であつて、南無阿弥陀仏という名号は親の方より名乗を挙げ給う声である。これを聞くと如何に如何で安心せざることのあるべき。勿論聖道を捨て、念仏を事としても、此方から向うて居る計りでは安心が出来ぬ、人生の上には此広大の恵が向うから来て我々を救うて下さるところで安心が出来るのである。この安心は全く仏願の賜である。南無阿弥陀仏の恵みである。其処でこの名号を称えるのは我々の方から仏を求むる声でなく、心切に胸裂くるの念仏でなしに、仏の方から「汝我名を持って、我迎えん」と喚び給う声に應ずる感謝の叫びである。此事は常に耳慣れて居る事であるが、軽々に聴き去つてはならぬ、法然上人は九才已後求めて、四十三才に及んで初めて氣付かれた。勿論それまでも念仏を称えられたに違いないし、又弥陀四十八願の文を眼にせられたに相違ないが、未だ弥陀の本願の意を讀んで居らぬ、未だ人生に此仏願のあることを氣付かぬ、然るに乃至十念若不生者不取正覺の本願の誓約にまかせて疑なく念仏せられた所以のものは、全く仏の親に遇うたのである其処で法然上人は此自己の信仰の書に題するに選択本願念仏集という名を以てせられた。寔に上人の称うる念仏は選択本願の念仏である。徒らに口を動かし声を出さず念仏でない、仏陀の手元から、他の種々の教法無量の行業によ

ねば真の絶対の念仏でない。法然上人の念仏はこの最後の念仏である。世人動もすれば云う、苟も向上の道を辿る以上は、座禪も可なり、念仏も可なり、仏教も可なり、基督教も可なりと。是れ可なるが如くにして而も實は大に然らずである。信仰問題のぎり／＼は唯一でなければならぬ、其一つというも自分がどれ丈つとめても安心がならぬが、向うから広大の同情の恵即大悲大願の水を注がれたところ、あ、有難いと心中に仏の恵に氣付いた一念にころりつと安心して仕舞うて、今まで頼りて居つたところのすべてものは何一つも用はない、世界は一仏名号を称うる外に何物も無いと、一筋に恵を喜ぶ事になつては、いやでも力強く云わざるを得ぬ。捨つといひ、閉すと云い、擱くと云い、抛つと云う如く際利く出て来る意味がそこにある。こ

×十六
二四

こが實に浄土門の開ける源泉である。かゝる勢であるから其當時の人に睨まれ、罵られ、迫害せられたのである。若し法然上人が聖道門も結構であると云うて居たならば上人の信仰がちつとも頭われぬし、従て當時の人も仏の恵を知らしめて頂くことが出来なかつたのである。然るに上人が明快に一刀両断の言動に出でられたから、多くの人が救済せられたのである。そしてまた一方の反対者からは悪魔の如く見られたのである。かくまで法然上人が最も明快に唯一仏の名号を称念することを教え、其他は持戒破戒如何様なりともそれに拘わらず、唯念仏するのみにて救わるべしと喝破したは、全く上人の実験の源泉から進つた声である。

父と子

昭和九年
三十五卷七号 再録

池山榮吉

わたしの隣家に、よう／＼誕生して間のない赤ちゃんがいる。若い御夫婦の間に出来たはじめての女の子。

この頃——といつても、この二月か三月ほど——どうかすると、ときたま或声、何か節のある歌のような声が断片的にきこえてくる。

低い声である。はじめはやや遠くかすかに、そしてそのまま遠のいて消えてしまうこともあるし、だんだん高く、ゆっくりと近づいてくることもある。

メロディーは聞覚えがある。その筈だ。家の前にさしかかるのを聞いていると、軍歌だ、此頃町のどこでも大きく、大人も子供も歌う日清日露戦争当時の軍歌なのだ。

しかし今大きく声は大勢のではない、一人のだ。しかも子供ののではない、たしかに歴平とした男の声だ。

さあわからぬ。なんぼ非常時の真最中、日支事変、戦いまさにたけなわの時とはいえ、大の男が昼日中、となり

ると、どうだましてもすかしても、なかなか御機嫌が取結べない、全く手におえなくなる。

寝就きのわるいのに対する最上の方策として、古今東西を通じて、恐らく人間の親子というものが存在してからのかた、普く認められ、用い慣れ来たものに子守唄がある。

となりの若い御主人は、今その手をやっているのだ。むずかり出した嬢ちゃんは、お父さんの懐で、軍歌に聞き入り乍ら、近くの櫟林のあたりまで来ると、大低寝入ってしまふのだそうだ。

と知ってからは、例の歌声がひびいてくると、思わず微笑みにはいられない。なんともいえない和やかな心地。

万有のうちに鳴り渡る諧調そのものを見聞するよな、フアウストなら、ましてしばし、なんとお前は美しい」と叫ぶところ。

世に子守唄は数かぎりなくあるが、しかしそれはただ子守唄としての定めを持っているというだけで、子守唄必ずしも子守唄として用いられるとは限らない。本来子守唄でないものが、子守唄として代用される場合も少なくない。こうした場合、歌の内容よりも、歌手の目的が決定を与える。今問題となつている場合も矢張りそうで、内容、規定の上からいえばただの軍歌であるが、目的、実践の上からい

近所にきこえるほどの声で、軍歌を歌いながら、一人ぶらぶら表を歩くなんて？

正気の沙汰ではあるまい。が、あたりはひっそりとして、石をなげる悪童の気配もなし、当人もいとも静かに通つて行くらしいので、変だなど思い乍ら、わざわざ外をうかがつて歌の主を見極める労を取るでもなくそのまま過ごしていた。

が、そのうち家の者のかたるところに依つて事情が判明した。

歌の主は隣家の若い御主人、いつもきまつて嬢ちゃんを抱っこして。あ、そうかと言つたよなわけ。

総じて子供には、寝起きのわるいのと、寝就きのわるいのとあるらしいが、嬢ちゃんは後者に属する方と見える。目がさめたときは、にこにこして御機嫌斜めならずだが、ねむたくなりかけるのを合図にむずかり出す。さあそうな

えば、立派な子守唄である。

本来軍歌であるものを子守唄として扱う。そこにいくらか創作的意義が含まれている。一種の軍歌的子守唄、こうした意味でのお父さんの創作が子守唄として、聞く嬢ちゃんの耳にはいつてゆく。

歌と酒、酒と眠。こういった風に組み合わせると、その間ある程度の関連が認められるが、歌と眠、この二つの間には本来直接の因果関係はない。だから守りする人が、自分勝手な好きな歌を歌つたからとて、子供はねむらない、またねむれない。子供の眠りを催おさせるには、本来の、若しくは代用された子守唄でなくてはならない。

しかし子守唄にもせよ、それを聞く子供はどうして眠れるのだろうか？

子供は——皆がそうとも限るまいが、概していうと——決して眠るといふことを望むものではない。目のあいているかぎり、何かしよう、積極的に心身を働かせようという望みで一杯である。ねむたさにくつつきたがる目を、我慢して押しあげて、何かしようと思張るのが常である。

この傾向は、七つ八つから十前後のいたずら盛りの時分に殊に著しい。蓋し子供に在つては、かなり大きくなるまで、寝たいという慾求は、身体にはあつても、意識には上らないのである。

1944
1483
-1520

ましてまだ頑是な幼児に在っては、眠りたいという欲求が直接意識に上る筈はない。従って陰に睡眠の必要に迫られていても、陽に眠ろうという態度には出ない。ただ何か外のことをしようと焦る。眼耳鼻舌身意のいずれかを働かせようとするとするのだが、眠さに圧えられて、思うままにならない。そうした矛盾撞着がすなわちむずかりの因となる。だから守りする人が、子供の陽の注文に応じて、菓子をやったり、人形を抱かせたり、絵本を見せたり、望むがままに手に手を尽してなだめようとしても全く駄目。子供は意識しない不可抗的なねむたさに支配されているのだから、そこを見抜いて、子供の眠りをさそう手段を講ずるのが、子を守る人の思いやりである。そしてその唯一恰好の手段として選ばれたのが子守唄である。

子守唄は、どうして子供を眠りに引入れるのだろう。それは唄に心を集中させるから。どうして集中させるのだろう。なぜかよくわからないが（一寸心理学でも調べてみたいような気もするが、手許に材料がないから、まあそれにも及ぶまいとしておく）一つには歌の文句や、節にもよろうし、一つには歌手の心のこもる声にはだされて、じっと耳を澄ますからであろう。

が、また一つには、聞いている間に、何とはなしに、今

ルの名画に見とれる感がする。『一々のものが互いに織り交って全体を形づくり、一つのもが他のものうちに生きて動く』

なんたる美観だろう！ しかしただ美観（ファウスト）であるだけに止まるであらうか。『親鸞はただ念仏して』親鸞一人がためなりけり。かくのごときのわれらがためなりけり。

こうした言葉を聞いても、一応感心もするし、憧憬もするが、おなじ思いを我みずから実感することの出来ない人、乃至、しようとしれない人、これらの人々は、いつまでたっても、ただ傍でみる人に過ぎない。信仰の事実、情景に接しても、いつも自分を第三者の地位に置いて、単なる観賞の態度以上に出ない人、こうした人が余りにも多きに過ぎるのは遺憾に堪えない。

莞爾として心象を眺めていた私は、やがて、なんだかたまたしいがからだから離れて行くような微妙な感じに驚かされて、更に一段と目を見張って心象を見直すと、何ぞ計らん、自分自らをその中に見出したのであった。

あの赤ちゃんが私なのだ。私は子守唄を聞いている。わたしの子守唄は念仏だ。歌い手は言うまでもなく仏、一心正念直来と呼びかけたまう仏なのだ。

大きく声が他の何ものにもまして、しっくり心に叶い、時にはそうした自覚をさえ伴うからであろう。

こうして唄に聞き入るうち、他面、余の雑念が遠のいて唄に一心するからであろう。

歌に聞き入るのは暗に歌うのである。よく聞く者は、歌手と合唱若しくは輪唱するのである。歌を伝って、歌手の心が聴者の心に通じるのである。聴者の心が歌手の心を受入れるのである。

こうして眠りが結果する。

眠りは子供の心の奥に潜む欲求である。歌はその欲求の意識しない欲求である。その欲求を充たしてやろうが為、心をこめた子供への賜物が子守唄で、それに引かれて、ただほればれと合唱輪唱するのがよく聞くものの態度である。こうして事実のように織込まれた子守唄は、概念的な、単なる見本として陳列されたそれではない、活用された、謂わば『生ける子守唄』である。

今私達の眼に浮ぶ『生ける子守唄』の父と子。わたしはこの心象に見入ってそくばくの教えを聞く。

わたしは先ず、信ずる人が仏に抱かれる姿を見る。

子供姿のイエス・キリストを抱く聖母マリア、ラファエ

子守唄の父と子について言えることは、類推的に仏と人について言える。従って経論聖教の多くは、子守唄の父と子のどこかに納まると言ってもいい位、子守唄に結ばれた父と子の心象は、広く且つ深いものである。

悪戯に惚けて、ねむたさを意識もしないでいる子供に、本当の安らかさを与えようと、意識下なる欲求を見通して、それを喚びさますでたとして子守唄を工夫し、倦まずたゆまず歌いきかす真心がとどいて、耳を澄ます子の心に、何よりも勝る歌の善さが泌々と感じられて、遂には声を合わせようと思ひ立たせる。

これと類似の展開が仏と人と念仏とに認められる。

かくて人生究極の欲求が充たされ、人生最高の理想が現前する。



今の一步々々

昭和二十一年 生野島に一時は居る （歴）

足利浄円先生が戦中戦後にわたって住まわれた瀬戸内海の生野島の船着き場には、先生の「頂上を忘れて登る不死の山」という句が碑に刻まれている。先生の残された夏期法座に私は毎年島を訪れるのですが、いつもこの碑の前で呼びかけられる先生の声をきく思いです。しかしこの句には容易に尽くせない深い心が宿っている思いがして、口ずさんでは行むのが常であります。

最近ある方から、昭和五十四年九十一歳で没しられた西尾実といわれる稀なる国語学者の全集をお借りして、その平明達意な文章を楽しく繙いてみると、「父のことは」という一文に出会いました。その語らいに心引かれるものがあるので、いさゝか記述してみます。

長野県の南、愛知県との境にある秋野峠まで二里半という山奥の小さな農村部落に生れた。部落は八戸しかなく天竜川の支流のまた支流にそった段丘にあった。十歳のときはじめ飯田まで十二里、父に連れられて歩いていった。

ことを思い浮べてきたのが、わたしのこれまでの生涯であつたといえる。

以上が西尾先生の回顧されている言葉ですが、私には何か胸に沁むものが感じられます。私はいつも無意識の底に結果ばかりを当にするような間違い心を感じています。その予想する好ましい状態に近づかずかと思つては喜び、叶わぬと思つては落胆するのです。また問題をかゝえてその解決に心を砕くようなとき、現在只今の為すべき一歩よりも解決される結果を追うて一喜一憂することが多いのです。これは無駄足ではありませんか。夢を追うことも必要でしょうか、夢ばかり追うているのも無駄足の一つでしょう。思うようにならぬ事態にくよくよ後悔し、愚痴に沈んだり、意気銷沈したりするのも無駄足でしょう。そのように返りみると、かぎりない無駄足に結局疲れているのがこの私ではありませんか。「遠い道を行くときは無駄足など一歩だつてしては駄目だ」との言葉が響きます。

「遠い道」とはいろ／＼に味えます。青年が大志をもつのも遠い道でしょうが、老人が困つた問題をかゝえ、その処置に苦しむのも遠い道といえましょう。なぜならその問題の因は遠く過去に繋つているからです。また原因というもののは決して一つではありません。さまざま／＼な多くの因の複合から成り立っています。またわれ／＼には気づかれな

井上善右エ門

……朝早く、まだ夜が明けきらぬ頃、母に見送られて家を出て、夕方うす暗くなつてから飯田の親戚についた。はじめての大旅行であつたので、この途中での思い出が今も忘れられない。家を出て二里ほど歩くと、左側の土手の芝生が朝日に輝いていかにも楽しげな遊び場に見える。わたしはその土手にかけ上つてその芝生をかけ降りて道に戻つた。すると父が「遠い道を行くときは、無駄足など一足だつてしては駄目だ」と言つた。わたしはだまつて歩いた。

……それからだん／＼足が痛くなつて、足をひきずりながら阿智川の橋にかゝつた時であつた。「何時に飯田に行ける？」と不平そうにわたしがいうと、父は「そんな事を今考へたつてわかるものか、たゞ後の足を前へ、後の足を前へ運んでいろうちに飯田へ行かれる」と言つた。……後年当面する問題で、わたしは幾度となく無駄足をいましめ、労苦に耐え、前途がわからなくなつて、その時の努力を積み重ねる外はないような目にあつたときも、昔いわれた父の

い業の縁というものがあつた。世に運不運といつていますが、これも大きな要因です。だからその問題の解決は遠き道に喩えられましょう。因果というもののは恐ろしいものだとして老年になつて覚ります。それをどう教えるのか、その因果重々の山も遠き道です。

人間の心は妙なもので、何か困つた事があると鬱々として楽しみません。その暗い心を何とかしようと思つて、それは何ともなりません。ただ言えることは煩悩を相手にして悩んだり計りたり無駄足を重ねていると、いよ／＼深みにおちて疲労困憊してしまふということなんです。心は相手を選ばねばなりません。煩悩が煩悩を増します。「朱に交われば赤くなる」ということでしょうか。

そんなとき仏の眞実心と交わることが最も正しい道です。大悲心に触れるということはお念仏するということなんです。「我が親友」と呼んで下さる仏様のお友達になるといふことです。みすばらしい哀れな貧者が王宮に遊ぶようなものですが、たゞ／＼真心を以て歓迎して下さいます。善友相見て喜ばざることを得ましようか。亡き父も母もわが師もよき人々も繰出で出迎えて下さいます。お念仏とは広大無辺な大殿堂の中に歓喜の友と交わることです。そのとき煩悩の憂き悩みから思はず解放されて、此の世の事の成否の結果はどうなるうとも、ただ一日々々の為すべきことを為

河原田先生の著書

す道がおのずと開かれてくるのを感じます。
「今考えたってわかるものか、後の足を前へ、後の足を前へ運んでいるうちに行かれる」

と十歳のわが子をたしなめられた西尾先生の父上の言葉と、「頂上を忘れて登る不死の山」という浄円先生の言葉と、不思議に相通するものが感じられるのです。念仏して今の一步一步を大切にさせてもらいましょう。

昭六〇・二月二十六日、校了。

内からささええた力

吉野 秀雄

歎異抄讚仰歌

えにしありてこの夜の寒きはらわたに聖のことばしみと
ほりつつ

よき人の傷み哀しぶ語りごと声さながらに伝はれるはやししく

若きより繻きなれし書なれど今宵のわれはおし戴きぬ

言の葉はまことしずかに而してわがはた肝うち慄うな

水戸市史

はじめの巻 藤原正隆二年改元と報恩寺

歎異抄読みゆくなべに聖人の鏡の御影おもかげになつ

ついでにいえば、わたしは去年一月の末、かねて念願していた常陸の国、河原田の報恩寺の参詣を遂げ、その数丁先の青麦畑の中なる唯円の道場址をとぶらい、十二首の歌を詠んだ、これも数首を抄しておく。

河原田の唯円と呼びき歎異抄つづりし人ぞこの里の人

霜に焼けし杉を目ざして来つれども杉の木下に池よどむのみ

念仏の声火と噴きし坊の跡あはれ葉麦の畑中にして

其の底に留めしみ声にうながされ泣く泣く筆を染めし一

つつましく道場とのみいひならし日の所作はただみ名を讚へき

慈光日誌抄

月愛三昧

昭和六年 1935

いよいよ三月になりました。春のお彼岸をお迎えするんだと思うだけで、ほの温いものを感じさせられる昨今でございます。

花田先生、その後、おん目の手術のご経過は、いかがおありでございましょう、御見舞いもいたしません、申訳のないこと。そう申せば井上善右工門老兄も少し御不調とか、尤もこの拙稿の誌上に出るころには、必ずよくなつていてくださるに違いないと、念じることでございます。

漸く多年懸案の『被差別部落と教育と宗教』と題する文字通りの小著の最後の校正を終えて、出版社に本日、速達で郵送いたしました。普通、執筆者による校正は多くても三校までですが、このたびは四校までさせていただき、それになんども印刷になってからも加筆訂正、印刷所にも大変な迷惑をかけました。ともあれ、郵便局に届け、帰宅して、とめどもなくお念仏申し、なにかしら熱いものが流れ

源 派

西元宗助

でました。それは慚愧の泪でもありました。 平成元年十月十三日

わたしは大学卒業の前後から、ふとしたご縁で、いわゆる部落問題にかかわりをもってまいりました。一つには、伊藤茂光先生という大教育者にお会いしたからであります。先生は、わたしの郷里の大先輩であるだけでなく、高校（旧制）も大学も先輩。先生は京都市内のある小学校の校長として御生涯を被差別部落のために捧げられました。そのお歌に、

つぎの世は、われこの町に生まれきて 虐げの鞭、うけて立たなむ

と。先生はあるとき、この私に、たとえ、まかりまちがって、糾弾されるようなことがあっても、今の部落がほんとうによくあるのであれば、よいではありませんか。それだけの覚悟がなくて、なにができませんか。ほんとうのことを言えば、部落問題解決のためには、部落のために死んでく

れる「人柱」が、一人か二人かは、いるんです。と。
いまお一人。それが足利浄円先生。先生は二九二年（大
正十一年）三月三日の、かの全国水平社創立大会前後の、水
平社関係の印刷物を全部、当時の同朋舎でお引受けになり
ました。

わたしが、このことを知りましたのはある日、先生と二
人きりでいたときのございます。先生のそのときのお話
によりまして、明治の末に先生は、アメリカ・ハワイ
での約十年余の開教使生活を、病のために打ち切つて帰ら
れました。時に満三十歳余。ところがフトしたことから、
広島地方においても部落差別の露骨なことを目の前で見せ
つけられ、しかも差別する人も、される人々も、多くがご
門徒であること。そうでありながら当時、教団においては、
なんの対策も講じないどころか、教団内部においてさえ差
別のあること、このことを知ったときの驚きと悲しみ。そ
こで身辺の有力者に訴えてみたけれども、誰も真剣に耳を
傾けてくれない。そんなことで、「若氣のいなり」ということ
もあって、伯父の瑞義（足利）や伯母の和里子（甲斐）の泣
いてとめるのも聴かず「本願寺を飛び出してしまひ、衣食
のために同朋舎印刷所を始めたこと、そしてその因縁で水
平社創立前後の印刷のお手伝いをさせていただいたこと。
そのため、しばらくは警察の尾行のついたこと、そしてそ

そして、このことを領解するにあたって、一番導きの星
となりましたのは、実は聖人の『教信証』信巻末の涅槃
經「梵行品」の「月愛三昧」と阿闍世の入信のところであ
りました。わたしはこのところを、なんか繰返し拝誦し
て、感動し、最後には動哭いたしました。わたし自身もあ
らためて無根ノ信をいだいて念仏申したことでございま
す。

読者皆さま、お釈迦さまは、親殺しの阿闍世に対し、ひ
とことも、あなたの業なんだという無慈悲なことは、一言
も仰せになりません。それどころか、あなたは少しも悪く
ないのだと、月愛三昧をもって慰められる、そして、阿闍
世に、「あなたにも、罪があるのなら、この私にはもつと
もつと深い罪がある、責任がある」と仰せになって、言外
に、釈迦如来は、最も罪業深重なるものは、この私でご
ざいますと。ここにいたって阿闍世も私も、南無阿弥陀仏
と、無根の信をたまわけて、起ちあがるのでございます。

「世尊よ、世の中の苦しんでいる人を一人でも二人でも、
もしお助け出来るためでございますれば、たとえ、この身
が永遠に阿鼻地獄に陥ることになりましようとも、どん
な苦しみにも堪えさせていただきます」と、まことに「他
力の信心」とは、まさにこの地獄行きわが身が、「大菩提
心」をたまわけて立ち上つていく身にしていただけるとい

大正十一年 五月 水平社、東京教育出版
九二二
1973-1944 (68A)
1944
水平社、東京教育出版

の頃の僧侶仲間での理解者は中井玄道師（玄英兄の先代の
尊父）であられたことなど、お打ち明けになって、最後に、
自分ももう年老いて、なんのお役にもたたない、ご苦労さ
まであるが、と仰せになった、そのお言葉が今も身に沁み
る

○ ○ ○
ところでこの五十年余、部落問題に多少、かかわらせて
いただいたお蔭で、この私は何を教えられたのでございま
しょう。

それは一に罪業深重のわが身ということ、全く無力無功
（効ではない功）のわが身ということでございます。そうし
てそうであればこそ、如来招喚の大悲の名号なるお念仏さ
まのほかに、われもひとも真に助かる道は、ほんとうは絶
対にないのだということでございます。

最近、業といふことについて、殊に部落問題に関連して、
いろんな説があるようでございますが、聖人における「業」
というお言葉は、つねに大悲（念仏）を離れてはないとい
うこと、それに業とは、つねに自分の業を問題にしなけれ
ばならぬのであって、自分以外の他人さまの業を、あれこ
れ申すことは、身のほど知らずであるということ、そんな
ことを、このたびの小著にも述べてみたことございま
す。

うことでございました。

讚 仏 真 船 正 己

三千歳の遠き昔に 萬代ののちの後まで 輝やかす
光めぐみし ほとけはや 仏とふとし あなほとけ
ならびなく深きなさに 諸々のなやみ重ねて明らけき
誠を啓きし ほとけはや 仏かしこし あなほとけ

天地に限りありとも常住の姿のままをゆるぎなき力と
さとす ほとけはや 仏はてなし あなほとけ
うつそ身の我等諸人迷えば 閻路に暮るる、一筋に
みのりによらん ほとけはや 仏たのしも あなほとけ

あなほとけ
はや深く
あなほとけ
あなほとけ

一道会の記(三)

榊原徳草

昭和五年十月二十八日 一道会 あとの茶話会に於ける榊原氏のお話のとき

この間、ハワイから来ている人で毎月の静坐会に来る新井さんに聞いたことですが、「慈悲」という言葉は「いつくしむ」頭を撫でること、「悲」とは、その者と一つになって「かなしむ」ということです。英語には「一つになって悲しむ」という言葉は無いという、「同情する」(シンパシー)の語はあるが、「悲」は無いとのことです。慈悲とは東洋の語で、特に念仏者の中に在って「仏心とは大慈悲これなり」身に心に本當に頂かせていただく仏様のお心ではないでしようか。

「久遠劫より流転せる苦惱の旧里は捨て難く、未だ生れざる安養の浄土は恋しからず候こと、よく／＼煩惱の興盛に候にこそ、名残り惜しく思へども娑婆の縁つきて力なくして終るとき、彼の土へはまるべきなり。急ぎまゐりたき心なきものを、ことに憫れみたまふなり」これは煩惱の盛んな迷いの此の土の方が住み易い、宿業ですな。「これにつきてこそ大悲大願はたのもしく往生は決定と存じ候へ」

やないか」と、私は叫んだのです。

すると先生は演壇に立たれて、ヒョツと後の黒板に「寒けりや寒いでえ、じやないか、偉らそうな顔をせぬがよい」と書かれた。そしてこの第九章のお話をせられました。

川畑愛義先生から「母情仏心」という「ふんだりげ」というパンフレットに書かれた一文を送って下さったので、それを読みます。

母情 仏心

恥ずかしいことながら私の母はほとんど無学文盲でありました。薩摩の片田舎の地主の娘に生れながら、お転婆(あばずれ)になっては困るとかいわれて、小学校にも上がれませんでした。その後、鹿児島市の裁縫塾へ行き、ここで文字も知らない屈辱を味わい、独学でイロハだけは学んだようです。そのような母でしたが三人の子供にとつてこの母親はまことに尊いほどの意義をもつ人でした。

十億の人に十億の母あるもわが母にまさる母ありながらいやめつたに小言らしいことを云はない母でしたが、ときたまにもらす述懐の中に忘れられないものがありました。その二つ三つを拾ってみましょう。

(暁鳥敏)

その(一)、「損をした港に入っても得をした港に入るな」と

「踊躍歡喜の心もあり、急ぎ浄土へまゐりたく候はんには、煩惱の無きやらんと、あやしく候ひなまし」と聖人は仰せになった。そういう奴だからこそ五劫思惟永劫の御修業があつたのである。

聖人の常の仰せに「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの(沢山の)業を持ちける身にありけるを、たすけんと欲しめしたちける本願のかたじけなさよ」と。

池山先生は「檜舞台に呼びあげられて」という題で御講話の時「唯円房の蔭にかくれている榊原さん保木さん、かくの如きのわれらがためなんですよ」と、奈良の会だったかの講話でした。私は先生の前講をしたんですが、至心、信樂、欲生の三心釈で「一念一刹那も眞淨真実の心に非ざることあることなし」一つ一つを至心、信樂、欲生で作つて下さった、即ち「大悲の一心なり」と仰言られる。そこが誠に有難かつたので「喜ばぬ人は、どうかしているのじ

いう言葉があるよ、もし二つの岐路に立つ時は損をする道を選びなさい。得をするわが身が危ないし、損をしても必ず仏様がみて下さるから。

その(二)「言う前にお聞き、聞いてから言いなさい。人は皆、言いたいものを持っている。それを聞いてからでないと、こちらの言いは聞いてくれない。あなたの言いはたとい黙つていても仏様がちゃんと聞いて下さるよ」

その(三)「人の親切をただもらいしてはいけないよ」
實際、母が亡くなる一週間前に、何十年か前に疎開先で井戸水を汲んでくれたA少年にお礼がしてなかった。あの子を探し出してお礼をしてくれと言われたことがありました。「世の中で一番の御恩は仏様の大慈悲だよ、それを朝晩忘れないように」とも。

私の幼い頃、報恩講の始まる前には例年のように仏具は忽論、家の茶碗やお皿などまできれいに洗い清めるならわしでしたが、寒風の中、あの時の母の小さい肩、後ろ姿が目には浮びます。報恩講の一週間は一切なまぐさいものを食べない精進料理でした。

《さきに参らせて頂く》

私は小・中学校時代は無宗教というよりも、むしろ反宗教的生活になっていたし、高校時代は左翼思想に走つたりしました。しかし薩摩のかくれ念仏の伝統を受けた母から

の薫習（しみこみ）は、いつとはなしに多少とも私を宗教的な思考の方へ導いていったようでした。その点、無学の実母こそ私にとって第一の善知識であつたともいえるかも知れません。

よしあしの文字をもしらぬひとはみな

まことのころなりけるを、

善悪の字しりがほほ おほそらごとのかたちなり

（自然法爾章）

御和讃には、

子の母をおもふがごとくにて

衆生仏を憶すれば 現前当来とほからず

如来を拝見うたがはず

とありますが、親思う心にまさる親心、いつも子供に對し親が先手であることを考へるとき、御和讃のうらに流れている母情仏心をうかがうときに「子を母が思うが如くに、衆生仏を憶すれば、現前当来遠からず」と読み換へることも許されるかも知れません。

母は八十才で肺がんで亡くなりました。しかしお先にお参りさせて頂くとか言つて静かな微笑もた、え、少しも死など恐れるところがありませんでした。また、大麥清潔好みで死の直前まで身辺をきれいに整えていました。亡くなつて下着を着換えさせたととき、小さな木綿の袋が出て来ま

した。医学を信頼しわが子を二人とも医の道に進ませた母は、自らの身体もついに医学に捧げる結果となりました。

聴衆の質問

「今の母情仏心」の「言う前に」の所を。

ではもう一度読みましょう。

その(二)、「言う前にお聞き、聞いてから言いなさい。人は皆、言いたいものを持っていて。それを聞いてからでない」と、こちらの言いは聞いてくれない。あなたの言いは黙っていて、仏様がちゃんと聞いてござるよ」

その(三)、「人の親切をただ貰ひてはいけないよ」

その(一)、「損をした港に入つても得をした港に入るな」

という言葉があるよ、もし二つの岐路に立つ時は損をする道を選びなさい。得をすると我が身が危ないし、損をしても必ず仏様がみてござる。

——ここで聴衆の中の一人が、花田先生のお話を録音してきたのを放送——

シイを巻え多川様

ここで皆様に今度印刷した池山先生の講話「ありそな」と、南無阿弥陀仏を一冊宛お配りする。これは昭和十年頃の「聖鸞」誌にあつたのを書棚の奥から発見して出版したもので、池山先生の「仏と人」其他の書物には上載されていないのであります。

した。それは母が最後まで身につけていた香袋でした。その時、私はそれまで母の体臭だとばかり思い込んでいたのは実はこの匂いであつたことに気づきました。母は死の日まで香気を秘めて周囲の人に接していたのでしょうか。母を最後までみとつてくれた看護婦さんが病室を出るとき、ふとつぶやきました。

「お婆ちゃん、きれいに死なはつたなあ」と。死にも美学があることを母は教えてくれたように思われます。

母が亡くなって暫くしてから母の死因や病症に不明な点が少なくありませんでしたので何とかして剖検させてくれないかという病院や主治医の方からの切なる依頼がありましたが、私は即座にそれを断つてしまいました。しかしそのうちに改邪鈔の親鸞聖人のお言葉、

「某、閉眼せば賀茂川に入れて魚に与ふべし」

を思いました。

当時はひどい食糧不足が訴えられていたので、親鸞はすでに魂の去つた体を生き物のために捧げようと考へられたのかも知れません。

私はついに主治医らの懇願を容れることにしました。母の遺体はコスモスの花の風にそよぐ細道を剖検室に運ばれ解体されました。その結果、生前数多の精密検診によつても分からなかつた疑点や、不明の病巣が数多く究明されま

それから皆さんと一緒に食事に移る。

食事を終り、皆が円座を作つて坐る。そこで長崎の平岡

坦様に此頃の心境をお伺いした。その大要は左の通りであります。

私は長崎に居りますが、学校を出て三菱造船所のゲラを

送つている所へ入つたのです。どうも頭がひねくれている

ので、学生時代は何でもなかつたんですが、社会へ出て見

ると、何かと自分に氣にくわれない、人と同調出来ないもの

が私にあつたんです。学生時代には全然知らなかつたんで

す。内向的人間なので、どうにもならないようになり、丁

度二十年間苦しみました。近角常観先生のお育てを受け

た方、私より十程先輩の方が矢張り常観先生のお育ての方

で、先生のことを先輩から聞いていたわけです。その方は

私によく話される、それは私が満たされないものを持って

いたので私によく話をなされる。外の人々にはしないが、そ

の横倉という人から、近角先生は、こういう時にこう仰言

つた等々を始終聞いて居つたけれど、どういふものか、よ

く云うて下さる横倉さんから最後の止めを頂けなかつた。

昭和三十年、長崎に来てから二十年目の年末に高原先生の所へ行きまして始めてお伺いしました。始めからこの先生に私は風邪を引いたものですから、お教えを頂きましたが、身体を診て頂くよりは心を見て頂きたいと思つていた

× 不三十五巻九号、水の味

が、思い切って云えない。ようやく昭和三十一年の暮に家内が参つて夜遅くでありましたが、先生は私のことをジッとして聞いて居られたようです。そして言われるには、本當に好い友達が出来た。今からでもいい、から連れて来なさいと、家内が報告しました。その時料亭で忘年会があったのですが、私は今考えると、その一言で転回が出来たように思ふのです。その後先生をお訪ねして色々伺ったんですが、仲々わからないんですが、本當にその時の「今からでも連れて来い、好い友達が出来た」とこの言葉一つです。何を聞いたかと申しますと、直接に私が聞かされたことは、自己を知ることだ、先生の話を要約すると「人生の最大の落し物は、自己を知ることだ」それがお念仏であること知らされました。それに付け加えて申しますと、或るお寺の掲示板に「人はこの世に自分を探しに出て来たのだ」と。高原憲先生は「人間の最大の欠点は、自己を知らぬことだ」と。本當に我が意を得たりと最近思ふわけです。こちらのこの会にも大分前から参りますが、先程のテープにもありますように、普通のお寺では本當の話が聞けない気がします。毎年十月この会に来ることを楽しみにして居るようなわけです。どうも有難うございました。

○ 続いて私から、藤谷純子さんに、何か信国先生からのお育てのことをお話し下さいと願いました、お話は次のようであります。

聞法の浅い私ですので、お話など申訳ないのですが、私

凡心と仏心

一、凡心のふれあい

顔が異なるように人々の心もまた銘々各々である。学生の頃読んだ『死の勝利』という小説に「相愛の二人が公園で同じベンチに腰をかけて、美しいバラの花を眺めているが、二人の心につつまるバラは夫々別々である。二人は永遠に平行線上にあつて相交る時はない」と悲嘆したものであるが、今もなお心に深く刻まれている。

医師は患者の身になり、教師は生徒の身にならねばならぬが、実際となると我愛の煩惱に障えられて至難である。地上では「子を知るは親に若かず」で親はいつも子の身になつて育くむが、それにも限界があり、また盲目の愛に陥る。青年期に意気投合した友も、時と所にさえられて、疎じ忘れて行く。

40 所詮は「独生独死、独去独来」と仏眼にうつるまんまが人生の実態である。不完全な凡夫同志では、心を一につにすることは不可能である。こうした人生だから「士は己を知

修國學

は榊原先生が「好き人」とされた池山先生を好き人として、その先生との御縁から念仏者となられた信国先生を通して私も始めてこうしたお念仏の世界に招き入れられた者なんでしょう。それで昭和五十五年十月のこの一道会に寄せて頂き始めました。それでも、始めて参つたのに、以前から深い因縁があつて寄せて頂いたような、なつかしい気持ちでおります。信国先生御往生の後には、どうして聞法させて頂くかと思つていた時、榊原先生と出合い、一道会に参るようになったんですが特に私が、信国先生から、こういうことが解つたなということではなくて、唯膚身を通して南無阿弥陀仏と先生の申される姿、生活、そういうものが私の中に膚身を通して触れさせて頂くというか、そういうことがお導きであつて、頭の中でお念仏とは何かとか、浄土真宗とは、とかいうことはお話することは無いんです。本當に念仏申されている人の姿、そういう方が開いて下さる御縁に身をよせて、私の身を通して学ばせて頂くというか、私の中の唯一の聞法というか、信国先生によつて開かれて来た道は続いて行くことだと思ひます。膚身を通して頂くこうした御縁を有難く存じます。失礼いたしました。

○ 以上で今年の一道会は終らせて頂きました。翌日は平岡様夫妻や、私の所に泊つた人々と共に昨日の余温の籠る十五畳の部屋で御相続が始まり、昼食は昨日の残つた料理で会食し、平岡夫妻の長崎へ帰えられる航空機の出発時間に間に合うまで、話が絶えなかつた。(終り)

花田正夫

人のために死す」と俚言にあるよう、自分を知つてくれる人があれば、その人と生死を共にしたいと願うのであろう。二河白道の旅人が、群賊悪獣に追いつめられて、無人空曠のはるか外に立つとあるのも他人事ではない。またよしんばうまく行つて居る人も、無常の嵐の前には一切が崩れて行く、親子じゃ、夫婦じゃ、兄弟じゃ、朋友じゃと互に頼む間柄も無惨に破れてしまふ。

二、凡心より仏心に

法然上人はお若年の時、父上が横死されたことが機となつて、仏道を求められ、叡山で修学修行され、あらゆる宗派を学ばれた末、仏性の一理を悟頭するのが仏教の真目的であるが「經典を披覽するに、其智最愚なり、行法を修習するにわが機すべとおよび難し、渡に舟を失い、闇に道に迷ふがごとし云々」と御自身に述べられたように、大難関に遭遇されたのである。

ここに、人生において、まことなる仏心、不滅の念仏の

こころをいたたくことの大切さは誰も知るところであるが、さて煩惱具足の凡夫の身、二元対立の相對差別の分別心しか持ち合せていない我等には、絶対平等の仏心のまことを知る目も、近づく足もない。

親鸞聖人もまたお若くして父母に別れられて、叡山に登られて二十年の御苦勞も空しく「煩惱具足の我等はいづれの行にても生死をはなることあるべからざる」に行き詰られたのであった。ここに叡山を下り、六角堂に參籠の末、吉水に法然上人を訪ねられたのであった。

まして我々のような愚鈍の身、而も真剣に道を求める心もない者は、もとよりその望みを断たねばならぬ。而も聖人は身をもってそのことをお知らせ下さったのである。この不可能の可能性は、絶対他力による他はないと導かれるのであった。

三、仏心より凡心に

生みの親をさえ自分の勝手次第では、火鉢扱、いする私共に、仏の大悲のまことを知る由もないが、この世の親でさえ、親心子知らずだとて子を捨てて親はない。まして仏心のまことは、この近づく足も、見る目もない私共をみそなわし、その故に飽までも捨ておけぬと、大悲大願を建立下さったのである。

歎異抄三章に「煩惱具足のわれらはいづれの行にても生

死を離ることあるべからざるを憐みたまひて願を起したまふ本意悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり」とある。私共は鏡が鏡自身を写し得ないように自分で自分を知ることが不可能であるが、本願のまことの光に照らされて自分の悪人悪人の姿を知らされるのである。

古歌に「奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ 親の身捨てて帰る子のため」と姥捨山の歌がある。老いた親を山に捨て、親もそれを得心しているが、山に登る道々で、しきりに枝折りするのを見て、親はまた帰ろうと思っていると思つて山の奥まで行った。いよ／＼の別れの時、「自分は老いてこの上は厄介者だからここで死なして貰うが、若いお前が道に迷わぬように枝折りしていたから、無事に帰っておくれ」と云われた時、はじめて親の真意を知り、不孝をわび乍ら親を背負うて帰った、と伝えられる。

仏の大悲もまたこの通りで、智目、行足のない私共になりきつて、倦むこともなく善巧方便をめぐらして下さるのである。近角先生が二十九歳の時、大煩悶の末に仏の大悲に気づかれた時「仏は同心の最大良友である」と随喜されたのである。

第三十五卷第九号

池山先生は「親鸞聖人と私」という題で、聖人を拝見しようと思えば、眼を外にはかり向けていては駄目だ、内に

「釈迦如来よろづの善の中より名号をえらびとりて、五濁悪時、悪世界、悪衆生、邪見、無信の者に与へたまへるなりと知るべし」 二〇四

とお説き下さっている。更に御和讃に、
縦令一生造悪の 衆生引接のためにとて 道緯 多僧和讃

仰 称我名字と願じつつ 若不生者とちかひたり

と讃御されている。称我名字のお願いには、若不生者不取正覚と、御自身の大生命をかけて下さるのである。お誓のついた本願！何とたのもしいことであらうか。なお
若不生者のちかひゆる 信樂まことにときいたり
一念慶喜するひとは 往生かならずさだまりぬ

とも讃御されている。 蓮花の傍に 二二〇

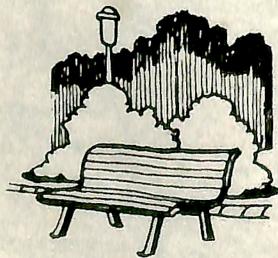
仰

わが心をつめると、そこにチャンと控えておいでになる。さてそれ以前は私が一人で喜んでいと、聖人もすぐ傍に居られて、一緒に喜んで下さるとばかり思つて居たが聖人の在所が知れた今では、私の喜ぶ心のうちに聖人のお喜びも流れているから、私の喜ぶ心即、聖人の御心と頂ける。また念仏を申しても一向に喜ばないにつけても「親鸞もこの不審ありつるにおなじ心にてありけり」と、身を苦毒の中においても飽くまで見捨てない大悲を体現された聖人なればこそ徹底した同感の御姿であらわれて下さるのである。総じて聖人が御一身にかけて仰言つた言葉は、私達から見れば、そのまま私達への御さとしと聞こえる。而も煩惱熾盛の衆生としての私達と同じ立場からの仰せだから、私達に強い響を与えるどころか、私達自身の内心の叫びとしか聞こえない。

ところが、不思議なのは、私達が勝手なことを思つたり為たりすることが、きっと聖人の何れかのお言葉に関連している。これはどうでも私達の心と聖人の御心が一つになつていて、私達の心の隅々まで聖人の御心が充ち満ちているからである。

以上の先生のお導をうけて、親鸞聖人がそのまま仏心のまことを身を以て私共にお知らせいただけるのである。

仏の善巧の大悲の至極を、親鸞聖人の唯信鈔文意に



あ
と
が
き

四月八日は釈尊の誕生日、花祭りの行事は懐しい思い出
となっておりませう。若人達には入学、卒業と、人生の newly
発の春、多幸なれと念ずるばかりであります。

慈光誌も三十七巻になりましたが、人と生れて、親鸞聖
人の教に遭い、凡夫の成仏させて頂ける白道に導き入れら
れて以来、このこと一つを我ひと共に讃仰させて頂いてお
ります。諸先生のみ教と、同信の先生方の御懇念にあずか
り又誌友の御支援を蒙って、十方に合掌しております。

近角先生の聖人の讃仰、池山先生の弥陀仏の善巧の大悲
心の渴仰、御味読願います。

井上先生は、足利浄円師の慈語を中心に、今の一步く
の大切さを述べて下さいました。

西元先生は、被差別部落の問題をお若い頃からいつも心
に念じ続けて下さいました。しかもその真実の解決は、お
念仏より外ないとお言葉、身にしますことあります。

一道会の記は、八十三を迎えられた榊原老師の一人舞
台で、それだけに、平素念じて居られたことをすべてお話
し下さったので、有難く頂きました。

凡心と仏心の拙稿は、最近の所感の一つであります。が、
「念仏で手をつないではじめて同心の友にも師にも恵まれ
ますこと」を不十分ながら申し上げました。御叱声をお待
ちしております。

私事で恐縮ですが、白内障の眼の手術をうけ、目を追う
て回復しております故、御心配下さいましたことを改めて
謝しております。第三日曜の午後の例会と慈光誌の発行が
私に与えられた大切な行事になりました。原稿の筆写や発
送についても皆様の御協力をいただいております。

御名一つ 生き杖として 老の春

定価 半年 八〇〇円(送共)
一年 一六〇〇円(送共)

印刷人

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

坂部 光雄

名古屋市南区駈上二丁目五三六

名古屋市南区駈上二丁目五三六

発行所

慈光社

編集・発行人

花田 正夫

電話 八二局七〇三七番

振替口座 名古屋 六〇〇七番
郵便番号 四 五 七